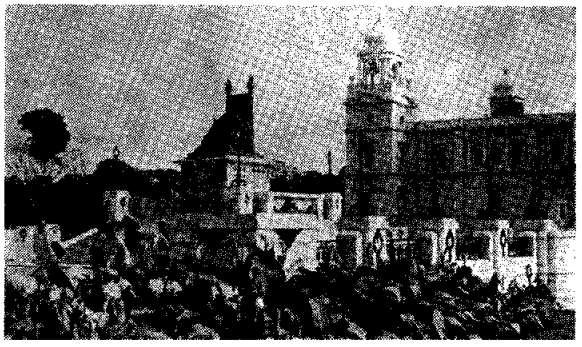


ビクトリヤモリアル

ひとつの発見

―ヒマラヤの旅―

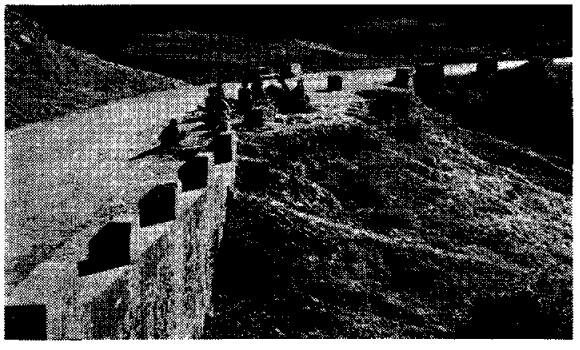
坂本直行

私は一昨年の九月上旬、横浜出港のフランス船に乗り、インドに渡り、汽車でネパールの国境まで北上して、約二カ月近い日数を費し、ネパールの首都・カトマンズに到着した。この旅の目的は、ヒマラヤのスケッチ旅行であった。むろん、はじめての外国旅行だから、なんでも見るもの聞くものが珍しくて、いろいろな苦労はあったにしても、楽しい旅であった。その間、一旅人として目に映ったことを断片的に書いてみる。

船は、香港・マニラ・バンコック・シンガポールと寄港し、最後はコロンボに上陸した。それからセイロンを汽車に乗って北上し、終着駅のタライマナールで下車した。ここは何もない、駅があるだけのところで桟橋が一本、海に突き出た殺風景な海岸だった。それから小さい汽船に乗り、約三時間でインド南端の砂漠の中の寒村・ラメスワラムに上陸、あとはネパールまで汽車で北上した。

その間、日本を離れてから私の目に映った東南アジアの都市は、皆、うらやましいほど濃緑の木々に埋まった街ばかりで、まったくすがすがしい気もちだった。とくにインドのマドラスなんかは、英国が残していった古風な歴史的な建築物と、豊富な樹木との調和は、うらやましい限りだった。熱帯は暑いから、たくさんの木を街に残し、あるいは植えて、大切にすることによって、ああいう美しい街ができあがったのだろうが、こんな美しい街からみれば、札幌なんか丸ハダカの街に見える。とても恥ずかしい姿である。

マニラ・シンガポール・カルカッタには、それぞれ立派な公園や、大植物園、大動



ダマン峠

物園があって、そのどれを見ても、管理がじつによくゆき届いていて、紙クズや煙草の吸ガラが散乱する風景なんか、まったくなく、私を驚かせたり、なげかせたりだった。なげかせた、というのは、日本の公園というのはあまりにチャチで、汚いものが多いからである。札幌の大通公園など、とても人様に見せられるものじゃないと思った。札幌の一枚看板の大通公園は、いまでは人があふれ、駐車場である。

しかし不思議に思うのは、こうした公園などの管理は、入場者や市民の協力がなければ決して実現できないはずだが、一方、街の衛生状態はどうかといえば、それとはまるっきり反対の有様である。これは一見、不思議に見えるが、これはおそらく、かつては世界を支配した、大英帝国が東南アジアに残した美風とも考えられる。

マドラスに滞在中、映画を見にいった。あの不潔と非礼と、無秩序のインドの風景とは反対に、映画館の中は意外にも清潔で静かで、エチケットがとくに厳しく守られているありさまに驚いたが、これなどは明らかに英国が残していった美風であると感じた。しかし原因がどうであろうとも、膨大な面積の公園を、あれほどきれいにしているということは、やはり市民の力以外に考えられぬことである。

コロンボにある東洋一の称がある大動物園を見たが、あんな大規模の、それに木に埋まり、動物園と植物園をいっしょにしたような立派さを見るにつけ、円山動物園のお粗末さが思われてならなかった。それにしても日本人が、そういうものを造る場合、植物や地形の利用の仕方の下手なことが痛切に感じられた。

日本の場合、都市計画そのものの中に貴重な樹木・草原はむろんのこと、地形と調和する美観などが、まったく無視されているといっても過言でないやり方を見ると、情ない気がする。赤ムケの土地に、盆景的な、箱庭的な庭が、いたるところに散見するが、目に映ずるのは、美しさでなくてみじめさである、国土の狭さのためもあろうが、すべてについていえることは、スケールの貧弱さと、お粗末さ、それに未来への読みの不足が目についてならない。

インドを汽車で通過するときであったが、田舎の小さな駅に停車した折り、プラットフォームにすばらしい大木が一本立っているのを見た。日本の場合を考えれば、こんな木はまっ先に切り倒されているに違いない。車道に一センチはみ出しているため、美しい花を毎年つけるアカシヤの木に、死刑を宣告する札幌市の場合と比較してみて、この駅のプラットフォームに立った木は、幸福者だと思った。こんな風景を見るにつけ、緑の街・詩の街・札幌なんていう宣伝文句は、お笑いぐさである。

トラックに荷物を積み、その上に乗り、未明からの三千メートルのダマン峠越えは、ショートパンツに半袖の姿では寒くてガタガタものだった。しかし峠を越したとたん、紺碧の空に浮かぶ、中央ネパールから東部ネパールにわたる巨大なヒマラヤ連峰の大パノラマが目にはいったときは、寒さなんか一ぺんにふっ飛んでしまった。

峠を越えて下るほどに畑が現われる。私はそこに点在する農家のたたずまいの美しさに讃嘆した。家は石をたんねんに積み上げ、それに粘土をたたいて、その上を練瓦色に塗ってある。しかしこの色彩は、あとでネパールを歩いてみて、場所によって違い、半分を赤く、半分を白に、あるいは全部を白く塗ったものもあったが、一部落の彩色の仕方は多くの場合、統一されていた。屋根はワラ葺きもあるが、スレートが採れる地帯では、スレートで葺いてあった。そして窓わくには皆、素朴な彫刻がほどこされ、緑・赤・黒などに彩色されていた。峠路の両側にある農家の赤い壁には、指で描いたらしい白い線で、花や人の顔や模様が描かれていて、なんともなごやかな気もちがして、それとヒマラヤの風景との調和は、私の心を暖かくもみほぐしてくれた。

それにもうひとつ、意外な喜びがあった。それは農家のまわりに植えられてあった花だが、皆私が少年時代から親しんできた花ばかりだったからで、原種に近いと思われるマリゴールド（これはヒマラヤの奥まであった）ナスターチューズ・セロシア・コスモス・ダリヤなどで、こんな花を前にして、ヒマラヤの展望を見るなんて、まったく夢にも思わなかった。私は大きな親しみとなつかしさを覚えてならなかった。

インドとの国境に接するビルガンジーから、カトマンズまで何キロあるか知らないが、バスで十四時間もかかるというから、大変な距離である。しかし、このカトマンズに通ずる唯一の直通道路は、意外にも補装されていたので、大助かりだった。峠の下りで、たくさんの労働者が道端にあぐらをかき、手にハンマーを持って、石を砕いているのを見て仰天した。これは人力による砕石である。何百キロあるか知らないが、この補装道路に使ってある砂利は、皆あのハンマーでたたき出したことを思えば、なんとも形容の言葉がない、気の遠くなるような仕事である。私はただ、その根気とエネルギーに頭が下がる思いがした。信号が青にならぬうちに飛び出す、日本人

の気短かさとくらべてどうだろうか。

またあるとき、補装道路の側に街路樹が植えられてあったが、それを保護するために、木の根元を上下の底を抜いたドラム缶が置かれてあった。なんのことはない、木がドラム缶の中から生えてる形である。うまい工夫だと思ったが、あとで木が丈夫に育ったとき、あのドラム缶をどうしてとり除くのだろうか、と考えたりした。日本ならば、あんなドラム缶は一夜のうち盗まれてしまうに違いない。

私はネパールに四カ月滞在して、ヒマラヤの山間を毎日歩きつづけた。それはまったく果てしない山道であったし、それに平坦な道はめったにない。学生時代、大雪山に登るのに、上川から歩き、黒岳に登って旭岳を越えたときは、当時、一番近い駅は美瑛だったので、そこまで歩いた。かなり長いアプローチだと思っていたが、ヒマラヤにきてみると、そんなのはお話にならない距離で、まったくケタ違いのアプローチである。有名なエベレストのヒラリー基地であるゴラクシェプまでは、二十日間も歩きつづけた。距離にして、おそらく二百五十キロはあるだろう。しかし、それがゆえにヒマラヤの風景は、よけいに美しいのだと思った。

この旅の中ほどにあるチャングマ・ラという峠を越したのは、十二月も中旬の頃だった。三千五百メートルのこの峠には、雪があって少々寒かった。ここで休息したとき、傍にあった立看板を見て驚いた。それはこの山上に、スイスのチーズ工場がある、という標識だったからである。いったい何年前からあるのか知らないが、こんなヒマラヤの歩く以外に交通機関のないところに、ネパールの農業開発のために、それも誰の目にもふれないジミな仕事をしているスイスという国に対して、深い尊敬の念にかられた。聖戦に名をかり、満洲や支那を侵略し、果ては全世界に迷惑をかけた日本人の愚かさと、この山上に立てられた小さな看板を比較してみて、この一枚の看板に、私は胸にせまる迫力を覚えたのだった。

話は前後するが、このチャングマ・ラにいたる前に、ジリーという部落の下を通った。ここにはやはりスイスの病院があり、山の上に小さな飛行場があって、小さなスイスの飛行機が飛んでいる話も聞いた。

私は食物の悪さからきた栄養失調と、何十日も風呂にはいらぬ不潔さから、この旅のスタートから痔の出血に悩まされた。いままで経験のないこの病気に、私は二週間悩みつづけて歩いた。パンツは出血に赤く染まり、私はガニ股をしながら歩いたが、血でガバガバになったパンツを三枚捨てた。しかしそのあとはもう予備のパンツがなかったので我慢した。このとき、友人が山上の病院まで足を運び、貴重な痔の薬をもらってきてくれた。「地獄で仏」とは、まさにこれである。私はこの薬のおかげで、痛みがうすれてゆき、ともかくも五千メートルのゴラクシェプまでたどりついたのだった。友人はそのとき病院の近くにある店で、ナチュラルチーズとスポンジケーキを買ってきてくれた。これも形容のない驚きと喜びだった。私はここでまた無条件で、スイスの偉らさに脱帽をしなければならなかった。その他、奔流する川に、スイス人の手になる立派な釣橋をしばしば渡ったが、私は真に平和を愛する国の姿を、まざまざと見せつけられた。

話はべつになるが、見たい見たいと思っていた、札幌郊外羊ケ丘にある北海道農業試験場を、昨日ようやく見る機会をもった。敷地面積は千町歩を出るというが、私が感激したのは、広大な面積を占める自然林が、その中にふくまれていたことである。それは美しさ広さから見て、文句なしに日本一である。

私はようやくいま、日本のお役所もここまできたかといううれしさを感じた。しかし、展望台と称する丘の上には、早くもガメツイ観光の波が押し寄せていて、バスがホコリをたてて往来しているのを見て失望した。

私たちの山仲間であるここの場長は、友人の話では、試験場内に道路をつけろとか、道路が駄目ならロープウェイをつけろ、というとほうもない観光業者のガメツイ圧力から試験場を守るために、まったくアホらしい時間と苦労をかさねている話を聞いて、寒々とした気もちになった。なんと情けない話ではないか。

ノイローゼ、暴力、殺人が渦を巻く世相は、緑を大切にしない行政が、その責任の一端を負わなければならないとみるのは、誤っているだろうか。私はそうは思わない。

緑をよこせ、青空をよこせ、なんていう叫びは、いったいいつになったら消え失せるであろうか。お寒い話である。

（山岳画家）